

site

毎日上り下りする横浜

谷戸地形と鉄道



敷地：横浜市中区山手

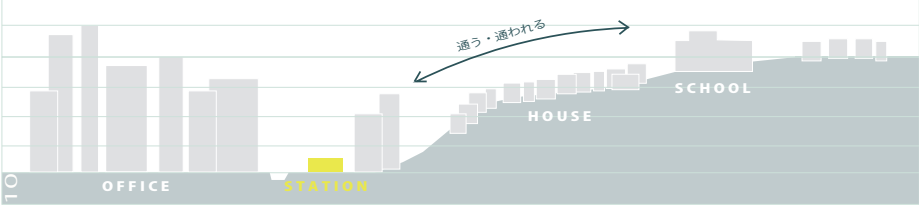


横浜の住宅地の風景：生えるように建つ住宅とまとまった緑



横浜は海拔50Mほどの多摩丘陵・三浦台地からなる。鶴見川・大岡川・帷子川・柏尾川がその台地を削って、湧水地、湿地、森林、畑、田をもつ谷戸地形ができた。谷地に鉄道が通る。周辺にはオフィスや店が集まり、斜面地には住宅が生えるように建ち並び、台地上には病院・学校・団地などの公共施設が集まる。そのため横浜の生活において坂の上り下りを必ず伴う。

横浜での典型的な移動



site

歩きたくなる横浜山手



敷地である横浜山手も低地に JR 石川町駅があり、山手の横斜地に学校や住居が集まる。ここでは山手の丘陵地と JR 石川町駅を行き来する人の移動圏を考える。その中でも特に上図で表している四つの女子校の通学圏に注目した。横浜特有の谷戸地形や開港以降の歴史を感じられる道や場所があるにも関わらず、学生たちは、--- で示しているように明快な道のみを使っている。

proposal

歩行そのものを居場所化する

目的地となる石川町駅や学校、家だけが土地の記憶ではない。道中にある山手の歴史や環境に目が向くように、含むように、移動経験を計画する。会社から家に帰る前に一息つける場所、学校を出ても学びが続いていく場所、大勢の友達と横になって歩ける場所、一人になりたいときに受け入れてくれる場所・・・目的地だけの点的な記憶・体験から、自らの居場所が連綿と続いていくようなまちを目指す。

様々な時間軸をもつものが存在する



開発されずに残る森から開港時の文化を引き継いだ地面や建物、その後に通った道や高速道路が坂の上下には混在する。

坂と坂を横断する経験に乏しい



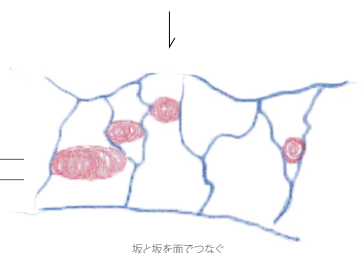
敷地内には七つの坂があり、高低差の往来は豊富である。しかし、坂と坂をつなぐ水平方向の経路が乏しい。そのため近くにあるが容易に行けないため認識していない場所が多くある。

diagram1 — site planning

今まで歩かれてこなかった、坂と坂の間にある余剰空間を敷地とする。低地（駅）から斜面地（学校・家）までの移動経路の選択肢が広がる。



現状



坂と坂を面をつなぐ



新しい移動経路

diagram2 — elevation planning

設計する建築はとなりの丘や階段から見えるようにする。



となりの丘がみえること

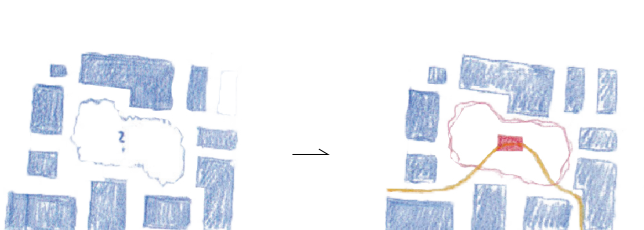


鉄輪坂からイタリア山庭園方面を見下らす

歩いていると、となりの丘や坂が見える。これによって土地の全体像と現在地が俯瞰でき、場所の認識が広がっていく。

diagram3 — architecture

今まで歩かれてこなかった余剰空間をひらくきっかけとして建築を設計する。余剰空間に意味を与え、風景の一部だったものから体得できるものとする。



現状よくわからない

建築があることでその環境がわかる

建築が日常動線を提供すること



フェリス女学院の敷地内の道

イタリア山庭園の小径

建築そのものに用事や目的を持っていなくても、我々は建築が在ることで拓かれた道を日常動線として利用することができる。

story

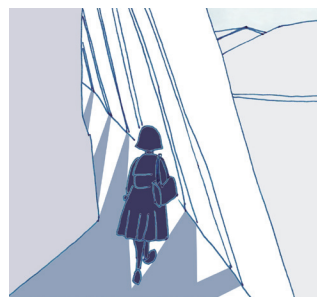
新しい通学路



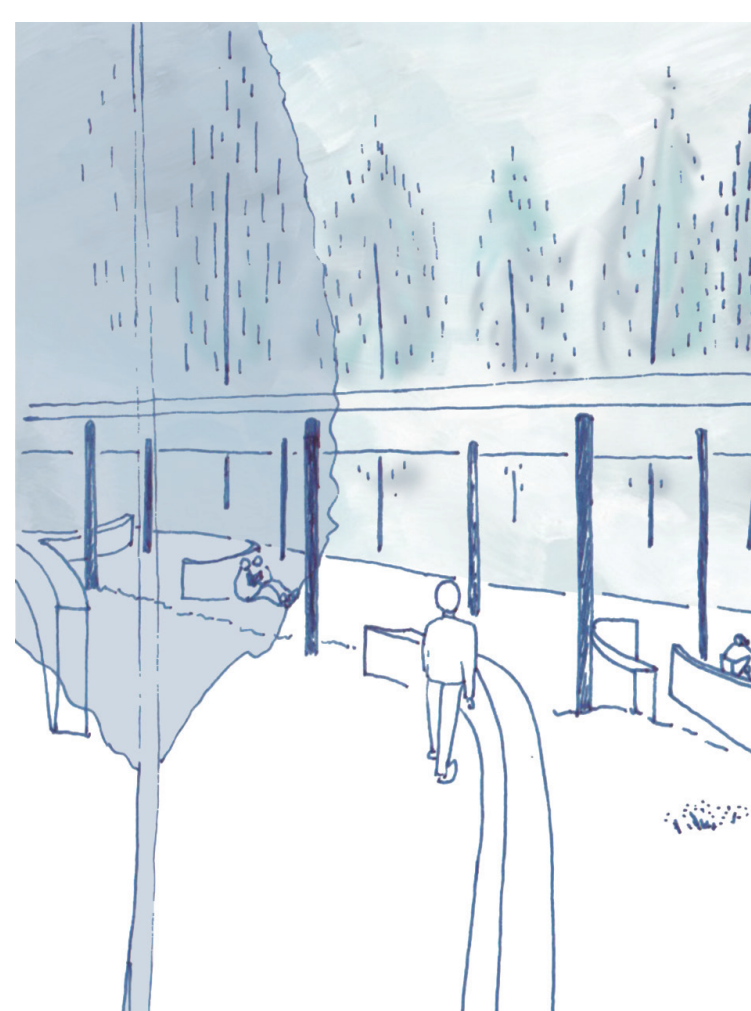
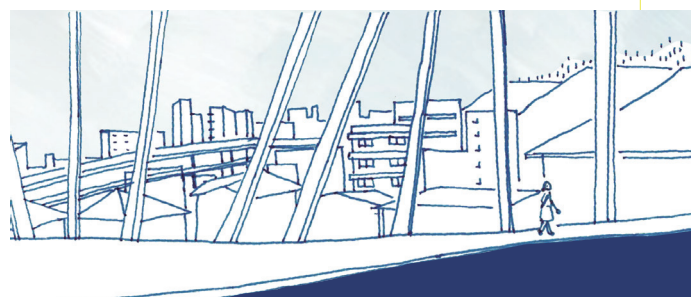
イタリア庭園から横浜港を眺む



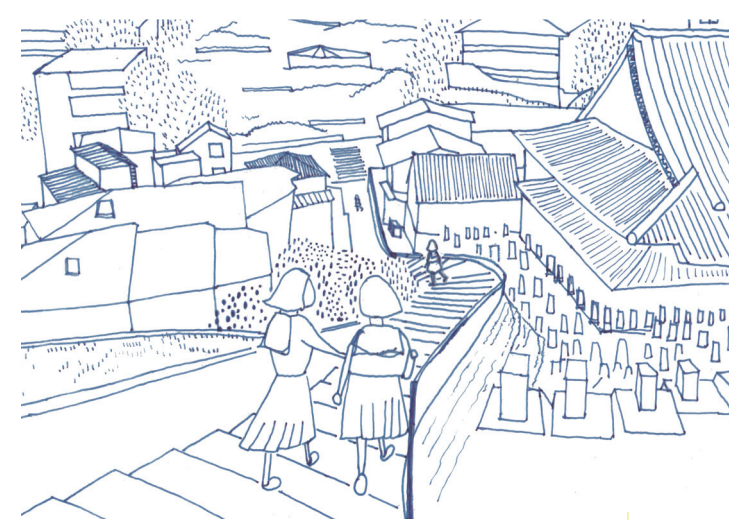
奥の景色が見え、だんだんとひらけてくる



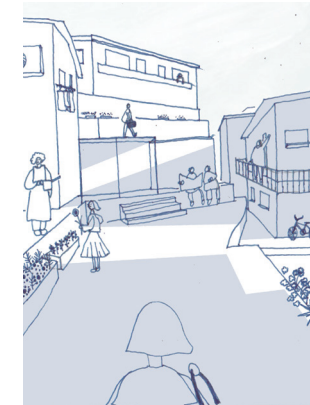
巨大な擁壁とまちの景色に挟まれる



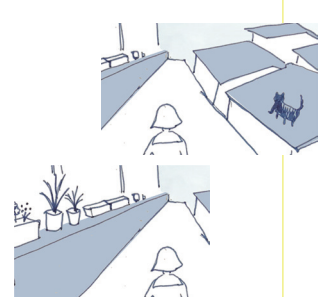
自然の形がつくる小さな擁壁とともに建築の中に入りこむ



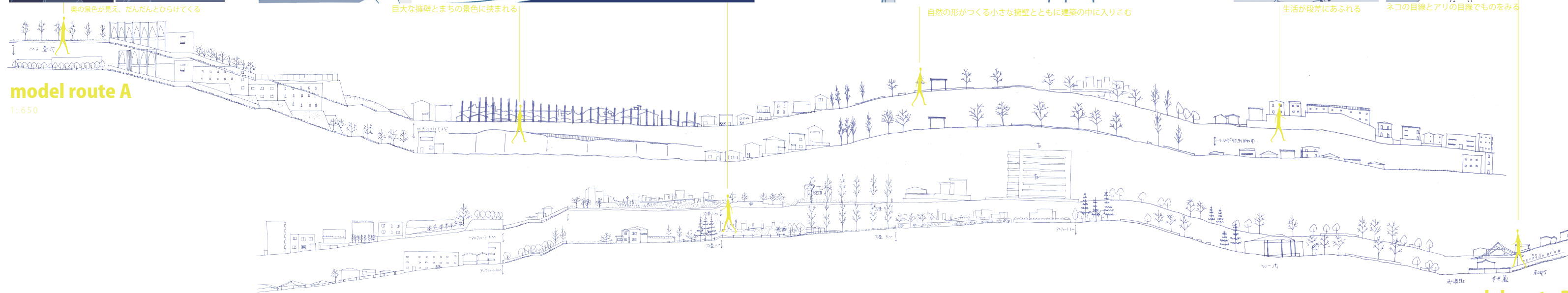
乙女坂から地藏坂をまたいで反対側にあるホールが見える



生活が段差にあふれる



ネコの目線とアリの目線でものをみる



model route A

1: 650

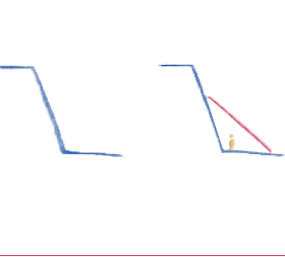
model route B

1: 650

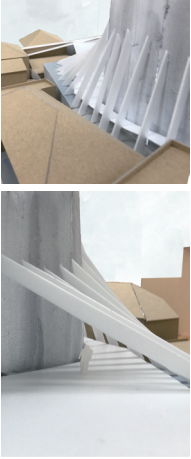
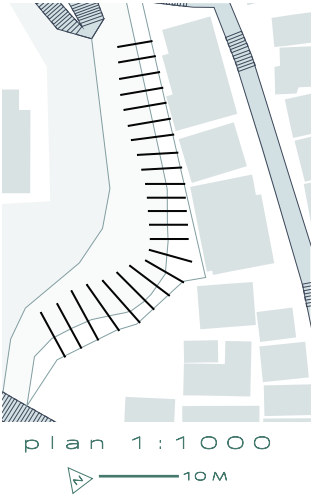


建 築 が 環 境 を ひ ら く き っ か け と な る

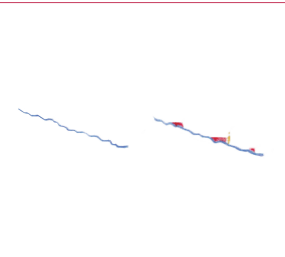
site1 巨大擁壁



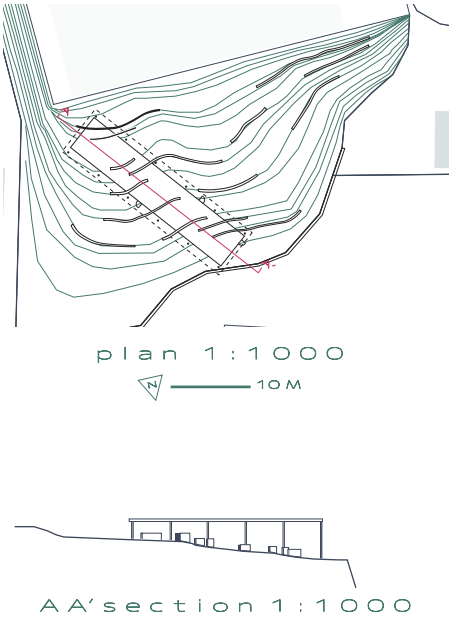
都市の中の壁となって現れてくる巨大な擁壁に対して、斜めの支えをつける。その斜度の変化にこの壁の大きさを改めて感じられると同時に普段風景の一部である擁壁にちかづくことができる。



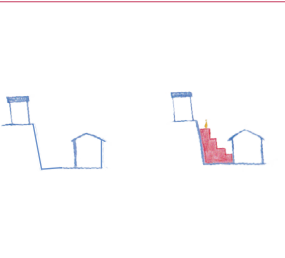
site2 森



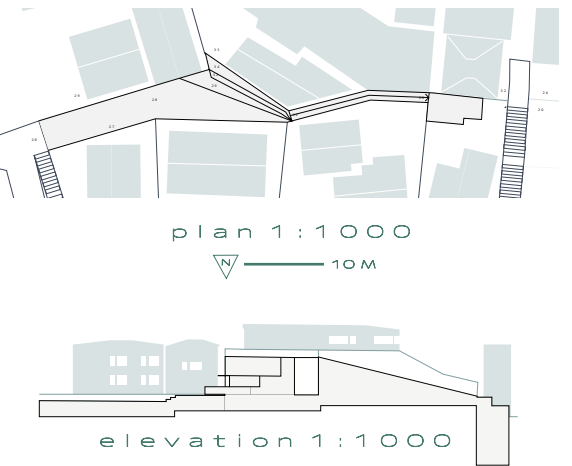
高低差をまたぐように図書室を設計する。緩やかな斜面に対して、小さな擁壁が等高線に沿って建ちあらわれる。自然地形が作る外構が図書室にも流れ込む。傾斜と擁壁があいまってお気に入りの場所を選び取れる。



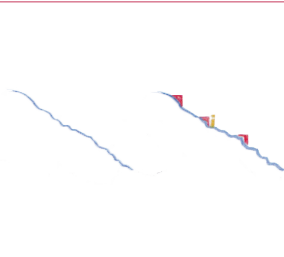
site3 住宅の基壇



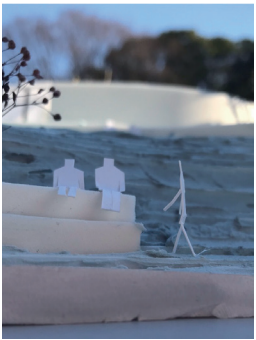
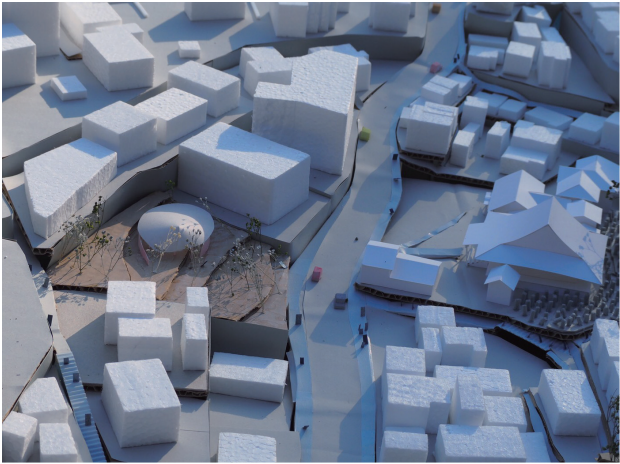
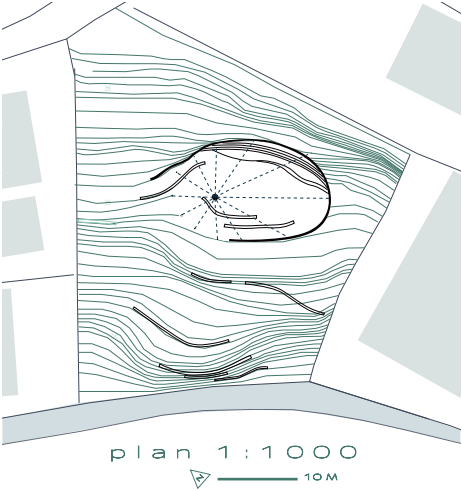
傾斜地にある住宅の基礎は高さ2m～10mに及ぶ。二つの高低差を階段広場で結ぶ。段差に生活があふれ、まちの廊下になったり住人と学生が得意なことを教えあったりする場所ができる。



site4 崖地



site2と同様に小さな擁壁をつくる。site2と異なり傾斜の緩急が激しい。その特徴を生かして大きな気積をもつホールをつくる。地蔵坂沿の建築の大きな基礎と同様に大きな壁となって現れてくる。



一小さな擁壁 (site2・site4) 沿うこともできれば、従わずに自由な軌跡を描くこともできる。同時に崖崩れを防ぎ環境を維持する外構ともなる。